



入試方法も奨学金制度も多種多様 綿密に情報収集すれば可能性は広がる

例年、高倍率を示している私立大学の医学部入試。10倍、20倍といった数値を見ると、思わずため息が出るかもしれませんが、こうした高倍率の背景には「一人当たりの受験校数の増加」があります。医学部を置く私立大学は限られています。選抜方法や出題傾向など大学ごとの特徴をつかんで相性の良い大学を選び、それに合わせた対策を立てる。そうすることで合格の可能性は格段に違ってきます。



富士学院
学院長
村田 慎一 氏

受験校数の増加と推薦枠の拡大で 一般選抜の志願倍率は増加傾向

私立大学の医学部は安定的に高い人気を維持しており、志願者数は増加傾向にあります。2024年度の一般選抜では志願者数が前年を約1万人上回り、10万人の大体に乗りました。2025年度はそこまで大幅な増加はなかったものの、依然として高い志願倍率となっています。2025年度の一般選抜の医学部志願者数は、昨年より約400人多い10万5846人でした。志願倍率は前年の36.9倍から今年は37.5倍に上がりました。

倍率が増加傾向にある背景には、一人当たりの受験校数が増えてきたことが影響しています。私立大学は国公立大学と違い、入試日程さえ合えば何校でも受験できます。富士学院でも私立大学を目指す浪人生は8～10校、現役生でも5～6校は受験しています。各大学とも募集人員が少ないので志願倍率はどうしても高く出ます。しかし、少子化の影響で受験生の実数は減っています。倍率だけを見てストレスを感じないようにしましょう。

入試は一般選抜以外に、学校推薦型・総合型選抜があります。一般選抜の倍率が高いのは、この学校推薦型・総合型選抜の枠が拡大したこととも関係しています。他学部に比べて比率は低いですが、それでも

医学部では募集人員の2割強を推薦型・総合型の募集が占めています。学校推薦型選抜では、高校1年次からの成績が評価基準になります。まだ間に合う学年であれば、推薦型も視野に入れて準備を進めることで、合格のチャンスを広げておくことが大切です。

科目数も配点、合格ラインもさまざま 来年以降は入試日程にも要注意

選抜方法は大学ごとに異なります。一般選抜の学力試験は1月中旬から2月中旬に行われますが、加えて2月下旬から3月中旬に後期試験を設ける大学も多くあります。また、帝京大学のように一次試験を3日間受験が可能で、合計点が最も高い日の得点を可否判定に用いる大学もあります。

学力試験の科目は英語・数学・理科2科目の計4科目が基本です。なかには2・3科目で受験できる大学もあります。理科は1科目だけ、あるいは英語と数学のみで理科を課さない大学、さらには数学の代わりに国語で受験できる大学もあります。また、配点の仕組みも全科目が同配点だったり、英語と数学の配点を理科より高く設定するなど、比重のかけ方は様々です。合格ラインの違いにも注意が必要です。偏差値が高く難しそうに思える大学でも、5割得点できれば合格ラインに届く、といった場合もあるからです。

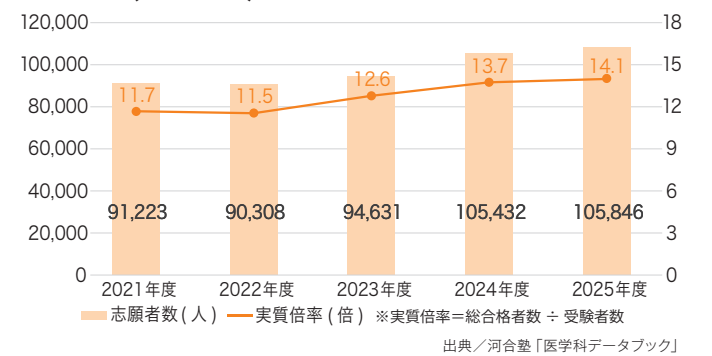
一般選抜には大学入学共通テストを利用して受験する方式もあります。共通テストを受け、一定のラインを通過できた受験生は2次試験として面接や小論文の試験を受ける、という形が一般的です。共通テストで課される科目は大学ごとに異なり、英語・数学・理科2科目の4科目の大学もあれば、これに国語・社会が加わる場合もあります。基本的に4科目なら得点は9割は必要です。ただ大学によっては8割以下で合格者が出る年もあるので、国公立大学を併願するのなら、共通テスト利用は一つのチャンスとして出願すべきです。

入試日程も重要なポイントです。2026年は2月1日に川崎医科大学、日本大学、久留米大学、東京女子医科大学の入試が重なります。これだけ重なるのは珍しいことです。私立大学の一般選抜は2月1日以降に実施するという取り決めがあり、その遵守徹底のため文部科学省が指導を強化しています。このため従来1月に入試を行っていた大学が、2月に入試日を変更する例が目立っています。

知っているか知らないか、その差は大きい 正しい入試情報の収集が可否に影響する

このように入試回数、受験科目、出題範囲、配点、合格ラインなど、私立大学医学部の入試は大学ごとに千差万別です。そのなかから自分にとって相性のいい大学を選ぶことで、合格の可能性は大きく違います。そのために重要なのが情報収集です。できれば医学部専門の予備校などで相談して対策を組み立てたほうがよいでしょう。わたしは全国の高校を回って大学受験の話をしています。それは、特に地方の高校では

私立大学医学部 一般選抜(前期日程)の志願者数と実質倍率の推移



大学受験の詳細な情報に触れる機会が少ないからです。通っている高校でそのような話を聞く機会があれば、是非参加して情報を集めておくことをお勧めします。

国公立大志願者のなかには、「私立は学費が高いから受けない」という受験生も多いと思います。しかし、国公立大学より費用がかからない私立大学もあります。たとえば兵庫医科大学では6年間の学費3700万円と生活費780万円を支援する制度があります。兵庫県内で一定年数を医師として働けば、返済免除になるのです。これは兵庫県が実施している制度で、一般にはあまり知られていないかもしれません。このように、情報収集の仕方次第で合格可能性が広がることもあります。

早いうちに志望校を決め計画的に準備する。そのために欠かせないのは時間感覚です。たとえば休日もだらだらせず平日と同様に早く起きる。それだけでも1日4～5時間の差がつきます。この差が年間の勉強時間の差になり、ひいては学力の差になります。長期的・短期的に時間管理ができるようになる。そこを意識して準備していただければと思います。

医学部合格者の共通点とは

「覚悟」を決めている人は強い

伸びていく人と変わらない人の差は学力の差というより、覚悟の差が大きいように思います。本気で医学部に入りたい人は本気で医師になりたい人です。そういう人は勉強に迫力があります。富士学院では入学と同時に、将来に向けた思いを文章に書いてもらっています。書けない人は講師が質疑応答しながら一緒に詰めていきます。その理由は、医師になる覚悟を早

い段階で固めることが、その後の勉強のモチベーションになるからです。医学部は他学部と違い入試が職業に直結しています。受験まで年数があるとしても、「将来こんな医師になりたい」「この診療科をやってみたい」といった具体的な目標を準備しておくことが大事です。





医学部合格の先にある**未来の良医へ**

成長を導き「**教え育む**」教育を実践

一人ひとりの生徒を大切にし、少人数制によるきめ細やかな指導を行っている富士学院。全国に10校舎を展開し、在籍者の2人に1人以上を医学部医学科に送り出しています。医学部進学の見据える独自の教育内容について村田慎一学院長に伺いました。



医学部予備校 富士学院
学院長
村田 慎一 先生

勉強を教えるだけでなく 医師としての人間的な成長を促す

少子化の影響を受けて大学入学共通テストの受験者数は減少しているものの、最難関である医学部人気は衰えず、特に私大医学部の受験者数は増加しています。厳しい受験状況が続くなか、医学部医学科に圧倒的な合格力を誇るのが富士学院です。2025年度も医学部医学科専願者663名のうち、実数で395名が合格。合格率は59.6%に達します。

その要因について、村田先生は「今の教育は“教える”だけで止まっています。大量のインプットにより知識は豊富でも、それをどう活用するかという“育み”がなされていないので、本当の力がつかないのです」と指摘します。そのため、富士学院では生徒一人ひとりに焦点を当て、勉強を教えるだけでなく、

「なぜ医師になりたいのか」という本質的な問いかけを徹底し、真の自覚と自立を促して成長へ導く「教え育む」教育を実践しています。

全国に10校舎を直営する富士学院には、高卒生を対象とした国公立医学部コース、私立医学部コース、国公立・私立併願コースの3コースに加え、現役生も受講できる個人指導があります。国公立医学部コースだけは選抜試験を実施していますが、それ以外のコースは合格を目指してまじめにがんばるという生徒を全て受け入れています。現在の成績を問わずに入学を許可し、医学部合格へと導いている点が大きな特徴といえます。「医師という職業に就きたい人たちをお預かりする以上、学力は当然として受験を通じて人間性も育てていきたいというのが出発点です」と村田先生。「成績を伸ばすには生徒が人間的に成長しなければ難しい。教えるだけでは限界があり、伸ばしていくための根っこの部分が大事です」と強調します。

教職員がチームでサポート 「本気」のスイッチを押し続ける

こうした学院の理念を支えるのが、熱意あふれる教職員の奮闘です。日々の授業は学力別で8名以内の少人数制。講師は生徒の状況を確認しながら授業を進め、1週間に一度の「週テスト」で理解度を確認します。各種テストの結果でそれぞれの生徒に合わせたフォローアップを行うのはもちろん、クラスの理解度によってはもう一度同じ単元の授業を行うこともあります。少人数の双方向型授業だからこそ、

医学部受験に精通したプロ講師に授業中はもちろん、授業時間以外でも質問ができる環境が整っています。

より重視されるようになった面接指導にも力を注いでいます。医学部受験は「医師という職業を前提とした就職試験」ともいえるものであり、大学側は受験生の本気度を見極めようとしています。そのため、面接で不合格となる受験生も少なくないので、当学院では1年がかりで取り組んでいます。

さらに、独自のチーム制で生徒一人ひとりをサポートします。生徒ごとに担任講師と教務担当が付き、全ての科目の講師と校舎長と共にチームを作って生徒の現状や課題を共有し、科目間の指導のバランスや課題の調整を行っています。チームとしての連携指導では常に具体的な目標を掲げ、その実践を後押しし、最終的には本人との相性を含めた出願先の提案までを行います。「どの生徒にも必ず“本気になる瞬間”、つまりスイッチが入る瞬間があります。富士学院では、形式的なチーム制ではなく、講師も職員も一丸となってそのスイッチを押し続ける存在です。そのためには相当な熱量と使命感が求められます。これまで誰も押せなかったスイッチを押すことができるのが、富士学院の強みです」

生活面・健康面のサポートも万全 卒後も根強くつながる富士OB会ネットワーク

ほかにも生活面のサポート体制として、男子寮・女子寮を全校舎に完備し、寮生だけでなく通学生も利用可能な学院専用食堂を設置。栄養面・衛生面に配慮した温かくおいしい食事を土日祝日を含めて毎日3食提

供しています。このように食生活を大切に考える姿勢は、健康面や生活面での取り組みとしても重要です。そこからも、『教え育む』という学院の理念が垣間見えます。

また、医師・医大生で構成される「富士OB会」の存在も特徴的です。2025年4月時点で約1,800名が登録しており、590名以上が医師として全国で活躍しています。同年4月には「OB会専用サイト」が完成しました。「医療業界が大きく変化する中、OBの医師・医大生が縦・横でつながり、直接情報交換できることは大きな意義があります」と村田先生。現在は、順天堂大学特任教授の天野篤先生を顧問に迎え、医大生向けの講演会の開催や全校舎で「自立講座」を実施。医師としての覚悟、責任、そして学びの姿勢について講演を行っていただいています。最後に、村田先生は医学部を目指す受験生にメッセージを送ってくれました。「合格を勝ち取るためには、“成長”が欠かせません。教科・生活・性格それぞれの面で、足りないものを客観的に分析し、目の前の課題にコツコツ取り組み続けることです。大事なのは、一人のときでも欲望や誘惑に流されず、自分に打ち克つ力を身につけることです。能力の差以上に、自身に打ち克つことが成長につながります。医学部入試は、学力だけではなく、人間力も問われます。部活動やボランティアなど、さまざまな社会経験を通して、人間力と学力の両輪を成してください。人の命と向き合って、止まりかけた人生を直接的に未来につなげられる職業は医師しかありません。そんな医師を目指して共にがんばりましょう。」

校内セミナーや過去問解説、入学前準備教育まで 高校・大学からの依頼を受け活発に連携を行う

富士学院では医学部合格を目指すサポートの一環として、依頼を受けた全国各地の高校へ出向き「校内医学部入試セミナー」を行っています。医学部入試の現状を解説し、合格までのポイントを説明するセミナーは好評を博し、年間約100校、延べ400校以上で開催しています。大学との連携も活発で、ご依頼のあった大学の医学部オープンキャンパスでの過去問解説を含む入試対策講座や、昭和医科大学の総合型・学校推薦型選抜合格者を対象にした入学前準備教育などを実施。高校・大学の双方からの信頼を獲得しています。



全国各地の高校と連携し「校内医学部入試セミナー」や「医学部入試研究会」を実施しています

